普通に生きる

http://www.motherbird.net/~ikiru

～自立をめざして～

「どんなに重い障がいがあっても、地域の中で普通に生きてゆける社会をつくる」
親たちはこの理念を信じてまっすぐに進んだ

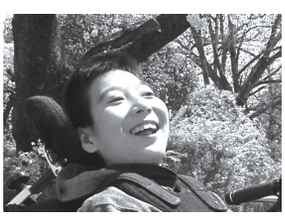
【イントロダクション】

静岡県富士市にある生活介護事業所でら～とは、『どんなに重い障害を持っていても、本人もその家族も普通に生きてゆける社会をめざす』という理念のもと、親たちの努力で、ゼロから立ち上げた重症心身障害児者のための通所施設でである。

重症児の多くは、嚥下障害、呼吸障害等のため、日常的な介護として経管栄養、痰の吸引、酸素吸入等の医療的ケアを必要としてる。そのため、でら～とには生活支援員の他に看護師も常勤し、毎日、それぞれの障害や個性に合わせたプログラムで日中活動を支援している。利用者は多くの人や地域との関わりの中で、社会性を身につけ、誰からも介護を受けられるように成長してゆく。そして親たちも、法制度の改革の波に揉まれつつも行政に働きかけ、自分たちのニーズにあった制度や施設づくりを行い続けてきた。

いずれは親も子もそれぞれの人生を明るく送れる地域社会づくりを目指して、『福祉の受け手から担い手となる』発想が、親たちの新しい未来を切り拓いてきた。

映画は、2つ目の施設建設計画が持ち上がった頃からの5年間を追う。



＜2011年度公開作品／長編ビデオドキュメンタリー／カラー／83分／SD／ドルビーステレオ＞
マザーバード 製作・著作・配給作品

＜制作スタッフ・撮影協力＞

製作・著作・配給：マザーバード
：プロデューサー・撮影：貞末麻哉子
：構成・編集：洪　福貴
：制 作 補　：梨木かおり

ナレーション：長谷川初範
音 楽：木 -kodama- 霊

ポストプロダクション：
CSW Cinema Sound Works
：整音・MA：中山隆匡・成ヶ澤 玲
：カラリスト：稲川実希・太田義則
制作協力：media EDIX

撮影協力
：社会福祉法人インクルふじ
：生活介護事業所でら～と・らぽ～と
：NPO法人くじら 陽だまりの家
：静岡県立富士特別支援学校
：富士市：富士宮市

＜主な制作スタッフ3名（マザーバード）について＞

マザーバードは、貞末麻哉子、洪福貴、梨木かおりの3名によって結成した制作共同体である。法人組織ではないが、グループよりは強い結びつきで共に映画制作に取り組み、今年で10年を迎える。

貞末は1986年、プロデューサーとしてデビュー作となった劇映画「ゴンドラ」（伊藤智生監督作品）、1991年には「あーす」（金秀吉監督作品）のプロデュースを手がけた後、「阿賀に生きる」(佐藤真監督作品）で記録映画の上映運動に初参加し、1993年に「水からの速達」（西山正啓監督作品）で初めて、記録映画のプロデューサーとして制作参加した。その後、「おてんとうさまがほしい」「風流れるままに」「伝承」「梅香里」など、多くのドキュメンタリー作品の制作・上映プロデュースを手掛けたが、「あーす」の制作現場以来、マザーバードの3名は、常につかず離れずこれらの作品とかかわってきた。

2001年、横浜市にある重度心身障害者の通所施設のパイオニアである朋の日常を記録した「朋の時間～母たちの季節～」（西山正啓監督作品）の製作委員会に3人で参加したのをきっかけに、マザーバードを結成。以来、3人で、主にドキュメンタリー映画の制作・販売・関連本の出版などを手がけてきた。マザーバードが制作した長編ドキュメンタリー作品としては、「晴れた日ばかりじゃないけれど」に続き、「普通に生きる」が第2作目となる。

現在は、インクルふじが運営するケアホーム建設のその後を追う第二作目と同時に、朋を設立した日浦美智江氏や、元宮城県知事・浅野史郎氏の記録映画を撮影中である。

【プロダクションノート】

「障害者の実情をよく知らない議員たちに、障害者福祉政策の重要性を知ってもらうため、でら～とに通う利用者の様子を撮ってもらえないか」と熱心なメールをいただいたのは2006年秋。メールの主はでら～との設立代表者であり、富士市市議会議員を務める小沢映子さんだった。

小沢映子さんとは、でら～とで、マザーバードの前作「晴れた日ばかりじゃないけれど」の上映会をしてくださった際にお目にかかっており、何度かのメールの往復で、結局そのオファーを引き受けすることにした。小沢さんから富士市の福祉事情などを伺い、富士市からメッセージできることを一緒に作品にしようということがトントン拍子に決まっていったのだった。

ちょうど富士宮市に「第二のでら～と」を建設する計画が持ち上がっており、その動きを中心に撮影を始めた。また、でら～との撮影と同時に、富士市でひとり暮らしを7年間続けている脳性小児麻痺の男性・渡邊雅嗣さんも撮影させていただくことになる。

東京から静岡県富士市に通い、こつこつ撮影を続け、2年後、関連第一作目である短編ドキュメンタリー「ささやかな日常～ひとり暮らしサイコーだぜ!～」が完成したが、その翌年、主人公である渡邊雅嗣さんが、心不全で急逝されてしまった。47歳だった。渡邊さんはそのDVDを携えて、各地の小学校を廻って、統合教育の必要性を訴えたいと切望されていたのだが、残念ながら叶わなかった。

他にも数名「でら～と」の利用者が亡くなった。重い障害を抱えて生きてゆくということの難しさに唇を噛んだ。「でら～と」がとても大切にしている成人式には結局3度参加させてもらったのだが、この日はどうにも涙で撮影どころではなくなってしまうのだった。

撮影を開始してから4年、この間に回した60分テープは、最終的に160本を超えた。いくつもの問題提起ができるほどの出来事が収まっていた。どのエピソードも内容が濃く、160時間上映できるものなら全部見てもらいたい程だ。

これを、マザーバードの洪　福貴が構成・編集し、制作補の梨木かおりも交えてスタッフ三人で激論激闘を交えながら再構築を繰り返し、追撮を重ね、テーマが徐々に「重症心身障害者の自立を支える社会の成熟」であることが見えてきた。まさにこの作業は肉を切らせて骨を断つ闘いであった。

しかし、完成が近づいた時、小沢映子さんに3度目の市議会議員選挙が迫っていた。映画は小沢映子さんの政治活動のプロパガンダが目的ではなかったので、完成予定を2011年4月末に仕切り直したが、東日本大震災に遇ってさらに延び、2011年5月末、ようやく完成に至った。難産であった。

日本は震災と原発事故により大きな課題を背負った。重い障害をもった人たちの笑顔が、少しでも日本の心の復興支援のお役に立てればと、マザーバードのスタッフ三人は祈るような気持ちでこの作品を送り出した。

＜富士市で行われた上映会で回収したアンケートより＞

● 自立をテーマにしている映画ということで、非常に興味深かったです。障がいと共に生きること、社会の中で生きること、この二つが結びつく難しさは、障がいを持つ姉と奮闘する母の姿を見て、とても歯がゆく思っていました。ですが、この映画を通して親は親の、子は子の独自の生き方と各々の時間を尊重する生き方を目指している方々を目の当たりにし、視野がぐっと広がりました。可能性を決めるのは一体何なのでしょうか…。どこまでも広がるはずだと皆さんは教えてくれました。ありがとうございました。（20代・女性）

● 日本を変えることのできる「力」を秘めた作品だと感じました。生きると言うことを再度考えさせられた気がします。日々、私たちが普通に生活している何気ないことにも注意を向け、これから生きていきたいと思います。ありがとうございました。（20代・男性）

● 「社会が育つ」この小林所長の言葉が深く心に残りました。自分の成長と共にどのようにすればより多くの貢献を社会に対して還元できるのかと深く大きな問いかけをいただきました。これは重度心身障害児者とそれを支える方々の努力と成果のドキュメンタリーという枠を超えて、より人に深い感動を与える作品だと思いました。最後に利用者のたくさんの笑顔が印象的でした。（40代・女性）

● 普通、これがどれほど大切なことか。ともすれば老いてゆく身にどうしようもない思いに駆られますが、なんと自分がちっぽけな人間であるか。人間としてもっと大切な思いを映画の中から感じることができました。（70代・女性）

● 僕は、この映画で改めて生きることがとても楽しく、嬉しいことがわかり、障害をもっている子も一生懸命生きていてすごいと思った。（10代・男性）

● 障害者と健常者の違いは無いと考えることができた。みんなの笑顔がキレイだった。また、みんなに会いたいな。（10代・女性）

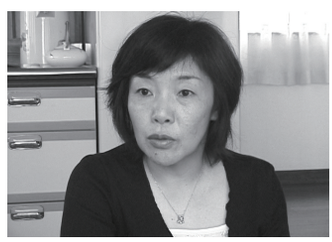
●主な登場人物

小林不二也さん・・・生活介護事業所「でら～と」「らぽ～と」の所長。
国立病院にて福祉職をしていたときに小沢映子さんに出会う。でら～との運営を支える社会福祉法人インクルふじ設立にあたっても積極的に参加し、保護者から絶大なる信頼を受けて国立病院勤務を退職して「でら～と」の所長に着任した。敢えて安定の道を捨てて、この法人に飛び込むことを決意させたものは、『重い障害を持った人たちでも普通に生きれる社会を作りたい』という親たちの理念に共鳴したからだという。

小沢映子さん・・・「でら～と」設立代表者。
長女の元美さんが出産時の事故により重度の障害を持っている。小学校の教師をして4年目だったが、元美さんの障害がはっきりしてくると退職せざるを得なくなった。元美さんが養護学校に入学後、同じ境遇にある保護者たちに呼びかけて「はなみずき」という親の会を立ち上げた。会では施設見学や、勉強会・講演会などを重ね、その活動が、「でら～と」の設立準備会立ち上げにつながった。2003年、前任者に請われ、富士市市議会議員に初出馬。2011年には3期目の当選を果たした。

小澤充さん・ゆみさん夫妻・・・重度の障害を持つ兄妹、小澤裕史さん、美和さんのご両親。
母ゆみさんは、レストラン（当時はランチのお店）のシェフ兼経営者である。子どもたちが養護学校に行っている間に、調理師学校に通い免許を取得。そして「でら～と」の支えを得て自分の長年の夢を実現させた。
父 充さんは、郵便局の所長職を退いて新しい自己実現をめざす。

細貝多津美さん・・・社会福祉法人インクルふじ理事長。
長女の英依佳さんが重度の障害を持っている。「でら～と」設立準備会での活動当初から小沢映子さんと共に活動してきたひとり。



■生活介護事業所でら～と・らぽ～と 社会福祉法人インクルふじ とは?

富士市のでら～と(2004年開所)と、富士宮市のらぽ～と(2009年開所)は、富士市・富士宮市で暮らす重症心身障害児(者)の親たちで組織した「はなみずき」が、様々な活動の末、地道な活動を続けながら設立した社会福祉法人インクルふじが立ち上げた在宅サービスの拠点。
開所当時は、支援費制度のもと、知的障害者通所更生施設としてスタートしたでら～とだったが、平成21年度4月より、自立支援法の定める**生活介護事業所**に移行した。

■インクルとは?

「インクルージョン」(障害児だけでなく、あらゆる人を誰も見捨てず、社会全体で包み込むという考え方)の略。

インクルふじ のホームページ　http://incle.jp

「普通に生きる」今後の公開予定 <各地で行われる**自主上映会**の日程は、公式サイト内[全国での上映予定]でご確認ください>

●東京都中野区　ポレポレ東中野　2012年 1月 7日
●神奈川県横浜市　横浜ニューテアトル　2012年 1月21日
●大阪府西区　シネ･ヌーヴォ　2012年 1月28日

よりロードショー公開

出産時の事故や、生まれつきの病気や難病など様々な事情によって、大きな身体的負担を持つことになった人たちが「普通に生きる」ことが困難なのは言うまでもない、と多くの方が思われることでしょう。実はこの映画には、～自立をめざして～というサブタイトルがついているのですが、「まさか、こんなに重い障がいのある人たちが、普通に生きるどころか、自立だなんて･･･」と、違和感を覚えたり、絶句して眉をしかめる方は、意外にも、ボランティアや地域福祉に精通されている方、社会福祉の要職につく方にも多いのでした。

しかしこの映画に登場する人たちは「どんなに重い障がいがあっても、地域の中で普通に生きられる社会をつくる」ことを理念に、不屈の信念で理想を目指し、夢を実現してゆきます。重い障がいの子をもつ親たちに対して、多くの人が普通に抱くイメージの暗さや偏見を見事に打ち破り、親たちは柔軟かつ大胆な発想で、自らの道を切り拓き、明るく自己実現を果たしてゆきます。

はじめは、我が子のために、親なき後の未来を案じて始めた活動がきっかけでしたが、親たちが獲得した"場作り"は、やがて障がいをもった子はもちろん、親自らと、地域社会をも豊かに育んでゆきます。

富士･富士宮市で親たちの努力によって作られた重症児の通所施設を五年にわたって追ったこの作品は、重い障がいのある人たちの世界だけをテーマにした映画ではなく、大きな意識変革によって社会を突き動かした、普通の親たちの、優しく、熱く、力強い行動の記録です。親たちや地域が、成果として得たものが何だったのか。それをぜひご自身の目で確かめてください。そして、成熟した社会づくりのために力強く今も闘い続けている、小さな町の大きな動きをぜひ、取材していただきたいのです。

日本は今、厳しい試練に立たされています。繁栄の裏で現代社会が失ってきたものの大切さと、生みだしてしまった「いのちの格差」の問題が顕わになり、今こそパラダイムシフトが必要な時であることを、この映画に登場する人たちが教えてくれます。被災されている多くの方々と、それを支えようとしている人たちが、明日と向き合う勇気を再び強く得るためのヒントも、この映画の中に見出すことができます。そして、多くの親たちが、生まれてきた我が子に障がいがあるとわかった時から、深い深い絶望の淵を彷徨い、死を想い、やがて笑顔を取りもどしてゆく過程で気づいた価値観の変化にも、未来へと明るく生き抜くヒントがあるように思います。

災害だけでなく、事故、病気･･･と、誰の身にも明日、何が起こるかわかりません。今の社会のままで、今の意識のままで、身に起こるすべてを受け止め、最期まで「普通」に笑顔で生きられるでしょうか。

媒体や発言する場をお持ちの方は、ぜひ、ご意見を発信してください。映画を飛び越えて、舞台となった施設や映画に登場する人々を広くご紹介いただけたら、制作者として本望です。　貞末麻哉子

マザーバードでは「普通に生きる」自主上映会を企画してくださる方を捜しています!

私たちが「普通に生きる」を制作した本来の目的はもちろん、おひとりでも多くの方にこの作品をご覧いただくことです。そのためには、全国での劇場公開の展開に力を入れたいことはもちろんですが、重ねてなお、**強く希望するのは、この映画をたくさんの人の手によって、少しでも多くの地域で、その地域に暮らす人々主催による自主上映会を開催していただくこと**なのです。

上映会を開くためには、多くの人の労力と時間と経済的体力が必要です。しかし、上映会を成功させることが必ず、地域の連帯や、地域の活性、地域の理解、地域の成長に繋がります。

そのために、多くの方にこの「普通に生きる」を利用していただけましたら幸いです。

各施設･団体･グループ等主催による自主上映のために上映用メディア（BD=ブルーレイ･ディスク）をお貸出いたします。
お住まいの地域でもぜひ「普通に生きる」の上映会を企画してください。

【上映用メディアの貸出料金】
■100名までの一般上映
･個人･グループ等が主催される上映会（入場料無料の場合）1日　52,500円（101名を超える人数×105円加算）
･個人･グループ等が主催される上映会（入場料有料の場合）1日　63,000円（101名を超える人数×420円加算）
･自治体･法人が主催される上映会（入場料無料の場合）　1日　63,000円（101名を超える人数×420円加算）
･自治体･法人が主催される上映会（入場料有料の場合）　1日　84,000円（101名を超える人数×420円加算）
■学校上映の場合　1日63,000円　（教育機関特別価格として人数制限なし）
（1日の上映回数が2回以上でも同一料金･入場料金は主催者がご自由に設定して結構です）

「普通に生きる」公式ホームページ **http://www.motherbird.net/~ikiru/**

■作品に関するお問い合せや取材依頼･上映の申込みは**マザーバード**までご連絡下さい■

〒167-0021　東京都杉並区井草5-6-8-206
TEL&FAX:03-6913-5591
e-mail:office@motherbird.net